

## 『源氏物語』古筆切二種

——ツレをめぐる搜索願——

横井 孝

### 一 実践女子大学所蔵古筆切の現在

古筆切研究の進展はめざましい。専門的な問題があるにせよ『古筆学大成』の巨大な成果はいうまでもなく、さらに藤井隆・田中登などの先駆者たちによって『国文学古筆切入門』（和泉書院、正・続・続々）、『平成新修古筆資料集』（思文閣出版、第一―五集）などの手軽な資料集が刊行され、一方では、村上翠亭・高城弘一・松村一徳・小林強・中村健太郎『古筆鑑定必携——古筆切と極札』（淡交社、二〇〇四年三月刊）、国文学研究資料館編『古筆への誘い』（三弥井書店、二〇〇五年三月刊）のように質の高い啓蒙書が上梓されている。

ただ、本来の用途として、古筆切は発生段階から歌書切が中心となるもので、平安時代の遺墨をはじめとして鎌

倉・室町・江戸と各時代のものが伝存し、その質量は膨大なもののはずである。二〇一〇年度の日本古典学術賞を受賞した久保木秀夫の『中古中世散佚歌集研究』（青簡舎、二〇〇九年一月刊）などは広瀬にして精緻をきわめる、最新の成果であるが、書名に端的に示されるごとく歌集切の体系的研究にほかならず、王朝物語の古筆切についての研究はこれに匹敵するもの皆無の状況である。たとえば、右掲の『古筆学大成』全三〇巻の中でも、物語等の散文資料はただの二巻を占めるに過ぎない。物語断簡の研究が待望されるゆえんである。

二〇〇九年一月二一日、田中登・別府節子・池田和臣・今西祐一郎の各氏をパネラーに招待し、本学においてシンポジウム「源氏物語の古筆切」を開催して、専門の諸氏のみならず一般に好評を得たことは記憶に新しいし、その後、二〇一〇年三月には武威野書院主催による「座談会 王朝物語の古筆切」<sup>①</sup>（稿者・横井が司会をつとめた）、さらに、これは物語に限定するものではないが、笠間書院による「座談会 古筆切研究の現在——今後どのように研究をすすめていくか」<sup>②</sup>がおこなわれた。まさに研究の熱を感じる分野になりつつあるのは、まことに興味深いことなのである。本学所蔵の『源氏物語』関係の古筆切については、代表的なものいくつかは既に報告されてきた。

- (1) 田中登「伝藤原為家筆『源氏物語』薄雲巻断簡の紹介」『年報』第二八号、二〇〇九年三月）  
伝藤原為家筆河内本大四半切「うつりてさうし……」以下一一行一葉。

- (2) 実践女子大学所蔵優品録一『実践女子大学所蔵／源氏物語関係古典籍図録Ⅰ』（文芸資料研究所、二〇〇九年五月刊）

田中（1）稿紹介の一葉、国文学科研究室蔵二葉を含めて、計八葉分（表裏ともに具えるものもある）のツレを紹介した。

- (3) 田中登「『源氏物語』関係古筆切三種」（本誌）

伝坊門局筆四半切（源氏物語）、伝四辻善成筆細川切（河海抄）、伝顕昭筆建仁寺切（源氏物語和歌作者目録）の三点。

いずれも鎌倉中・後期の貴重な本文資料であり、斯界の第一人者である田中登に紹介の執筆をお願いしたものと、それを基礎とした資料集である。

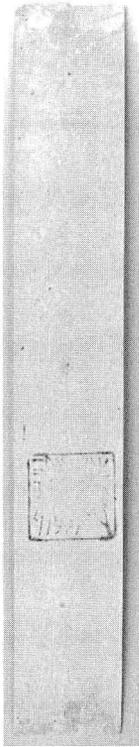
ここに、あらたに紹介すべき古筆切を見出したので、紹介の稿を起こすことにした。本来、またまた田中氏に検討していただくはずの資料であるが、あいにく年度末の多忙な時期でもあったため、急な執筆をお願いすることもできず、門外漢ながら稿者があえて簡単な紹介を試みることにした。

なお、今回紹介すべくして、検討の時間を欠くために見送らざるを得なかった断簡もあり、いずれ近い将来に順次公開してゆく予定である。

〔写真1〕 極札・表



〔写真2〕 極札・裏



## 二 伝阿仏尼筆切

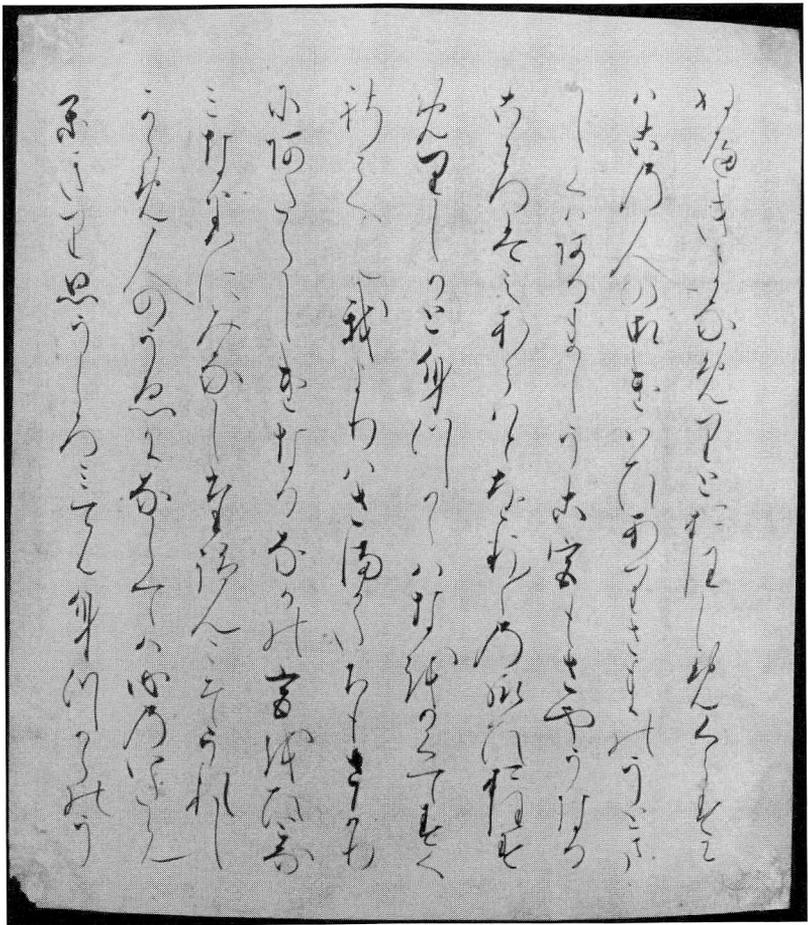
当該の断簡は文芸資料研究所蔵の『源氏物語』切で、購入した古書肆によれば、もと某手鑑に押しあつたものの一葉という。料紙は、縦一八・四センチ、横一六・四センチの鳥の子紙。「阿仏禅尼阿仏禅尼 為想母堂（朝倉茂入印）」とする二代朝倉茂入の極札〔写真1・2〕が

付せられている。

断簡本文は次のとおり。「写真3」として次頁に掲げる。

- ぬへきよなめりとおほしめくらすに  
1  
はこの人の御けはひありさまのうとま  
2  
しくはあるましようこ宮もさやうなる  
3  
こゝろはえあらはとをりくゝの給ひおほす  
4  
めりしかと身つからはなをかくてすく  
5  
してん我よりはさまかたちもさかり  
6  
にあたらしけなるなかの宮をひとな  
7  
みなみにみなしたらんこそうれし  
8  
からめ人のうゑになしては心のいたらん  
9  
かきり思うしろみてん身つからのう  
10

総角の巻の一節で、大君が、みずからはこのまま独身で過ごし、中の君（文中は「なかの宮」）が自分よりも器量がよく、まだ女の盛りであるので、薫に娶せたいと思う、心中が語られる場面、『源氏物語大成』一五九九頁6行目から11行目に相当する。おもな異同のある箇所を以下に挙げておこう。校異の略号は同『大成』に準ずるものとし、適宜補ったいくつかの本についても、明融本（実践女子大学図書館山岸文庫蔵）＝明、公条本（同）＝公、幽齋本（永青文庫蔵）＝幽のごとく示した。



[写真3] 伝阿仏尼筆断簡

断簡3行目「あるまじう」（一五九九七）

あるましく——明・大・肖・公・〔陽〕

あるまじう——御・池・三・〔河〕・〔国〕・中・蓬〕

あるましく——幽

有まじう——〔阿〕

あるまし——〔横〕・平〕

断簡4行目「こゝろはえ」（一五九九七）

御心はえ——明・大・肖

御心はへ——公

御心はへ——幽

心はえ——御・池・三・〔河〕・〔中〕

こゝろはへ——〔保〕

心はへ——〔河〕・〔陽〕・国・阿・蓬〕

断簡4～5行目「の給ひおほすめりしかと」（一五九九八）

の給ひおほすめりしかと——明・公・〔蓬〕

の給ひ。おほすめりしかと——幽

の給おほすめりしかと——大・御・池・肖・三・〔陽〕

の給おほしたりしかと——〔河〕

の給おほしためりしかと——〔保〕

の給おほしけりかすと——〔国〕

おほしたりしかと——〔阿・中〕

断簡7行目「なかの宮」(二五九九9)

なかの宮——大・御・池・肖・三・(河)

中の宮——明・公・幽・(国・中・蓬)

中みや——〔保〕

なかの君——〔陽〕

中の君——〔横・平〕

中君——〔阿〕

断簡10行目「思」(二五九九10)

思——大・御・池・肖・三・幽・(陽・蓬)

思ひ——明

おもひ——公

あつかひ——(河)・〔保・国・阿・中〕

表記の異同についても詳細に掲げたが、特に問題となるところはない。要するに、当該断簡はいわゆる青表紙本の本文と見て大過あるまいということである。

伝称筆者を阿仏尼とする『源氏物語』関係の断簡は『古筆学大成』に三種、小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」<sup>③</sup>、国文学研究資料館編『古筆への誘い』（三弥井書店、二〇〇五年三月刊）などによれば、さらに三種ないし四種あるという。いずれも鎌倉後期とみなされる、流麗ながらやや線の細い女手とも見える筆跡であるが、当該古筆切とは異筆のようだ。

『古筆への誘い』所収の杉谷寿郎藏夕顔の卷断簡は、当該切と同じく二代朝倉茂入の「阿仏禅尼為相卿母室」とする極めがあるが、「人」「我」などの漢字、「あ」「を」などの仮名の字体が異なる。このほかには、伝阿仏尼筆でツレと判断されるような総角の巻の断簡は管見に入っていない。阿仏尼の伝称資料にもう一種くわえることになるか。識者の検討を俟ちたいところである。

〔写真4〕極札・表



〔写真5〕極札・裏



### 三 伝冷泉為相筆六半切

こちらの断簡も文芸資料研究所蔵の『源氏物語』切である。料紙は、縦一五・六センチ、横一四・六センチの鳥の子紙。元来は六半の枳形冊子本であったと思われる。

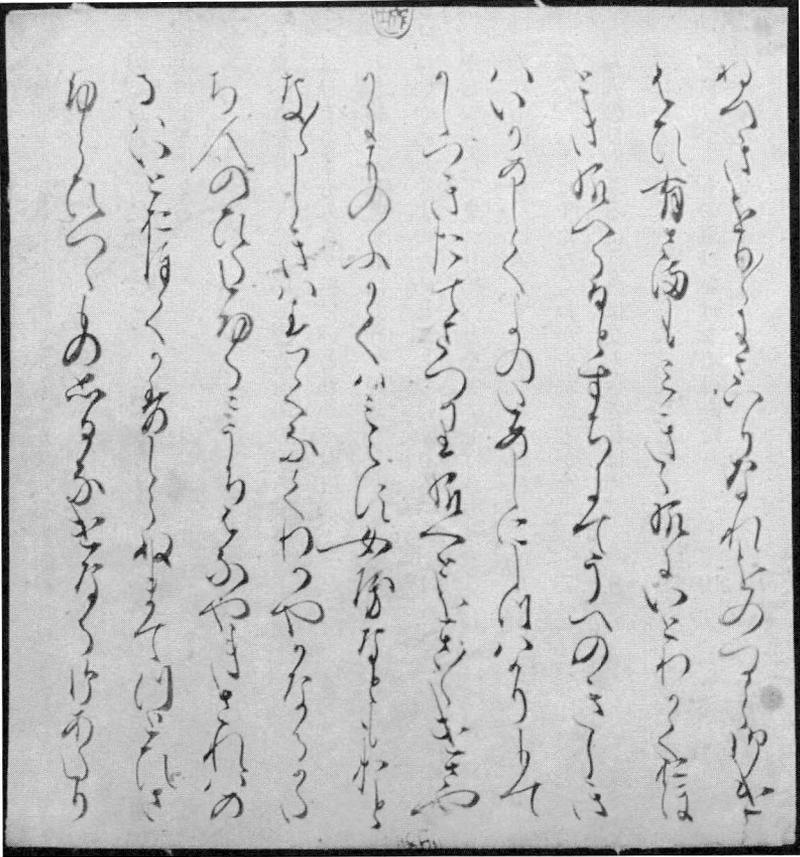
「為相卿ぬへき」とする古筆了任の極札〔写真4・5〕が付せられているが、伝称筆者を冷泉為相とする歌書切はかなりの数にの

ぼり、物語の断簡も少くない。『古筆学大成』を閲しても、伝為相筆の『源氏物語』断簡に一〇種をあげ、いずれも鎌倉後期とみなされる断簡である。当該断簡も同様と見てよからう。

この「写真6」に見るごとく、右端が詰められているが、もともと一面一〇行書きの本であったのだろう。翻字すれば次のようになる。

- |                     |    |
|---------------------|----|
| ぬへきをりくしまいりなれをのつから御け | 1  |
| はひ有さまもみき、給にいとわかとおほ  | 2  |
| とき給へるひとすちにてうへのきしき   | 3  |
| はいかめしくよのためしにしつはかりもて | 4  |
| かしつきたてまつり給へとをさくけさや  | 5  |
| かにものふかくはみえず女房などもおと  | 6  |
| なくしきはすくなくわかやかなるかた   | 7  |
| ち人のひたふるにうちはなやきされはめ  | 8  |
| るはいとおほくかすしらぬまでつとひさ  | 9  |
| ふらひつ、もの思ひなけなる御あたり   | 10 |

これは長い若菜上の巻末ちかくの一節で、夕霧が、身近になった女三の宮のようすを見聞するにつれて、父源氏や



〔写真6〕 伝為相筆断簡

周囲のあつかいの仰々しさに反して、その正体の幼さを感じ始めている、という心中が描かれている。『源氏物語大成』一一〇八頁12行目から一一〇九頁4行目に相当する本文である。これも諸本の校異を検討して、主な異同を見てみると以下のごときであつて、さしたる異同は見あたらない。

断簡2行目「有さまも」(一一〇八13)

ありさまも——大・御・横・陽・池・肖・三・(宮・尾・平・鳳・大・吉・岩)

有さまを——国

ありさまを——〔別〕

ありさまを——〔兼〕

断簡5行目「給へと」(一一〇九1)

給へれと——大・御・横・陽・肖・三・(河)

給つれと——池

給へれとも——国

給へと——〔保〕

断簡6〜7行目「おとなくしき」(一一〇九2)

おとなくしき——大・御・陽・池・肖・三・(河)

おとくしき——横

おとなしき——〔阿〕

断簡9行目「いとおほく」(二一〇九三)

いとおほく——大・御・陽・横・肖・三・(河)

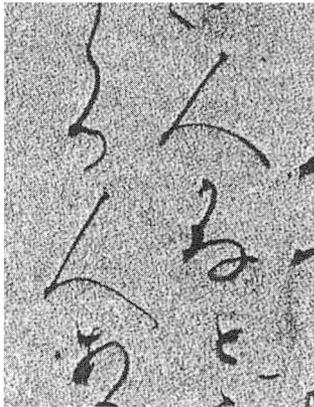
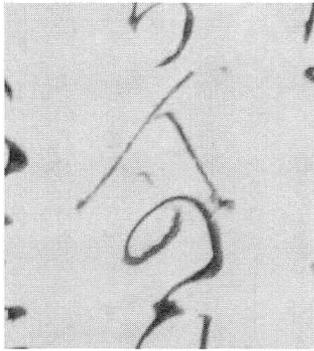
いと——池

おほく——〔保〕

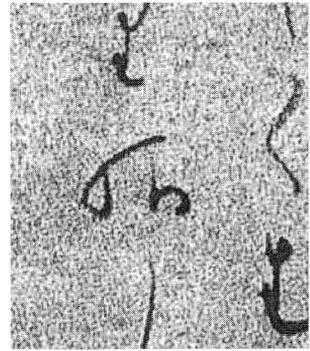
これも、要するにいわゆる青表紙本の本文である。

前記したように、為相を伝称筆者とする切は多種存在し、本学山岸文庫には、初代茂入の極めによって為相筆とされる河内本(早蕨・宿木両巻を合綴)一冊を有するが、一見しても異筆と知られるものであり、なおかつ一面八行書の四半本でもあり、形態を大きく異にする。

島根の美保神社蔵の「手鑑」<sup>4</sup>に押されているものは、当該断簡と同じ若菜の上巻、六半切で縦一六・六cm、横一



五・七cmとほぼ同じ大きさの由だが、料紙は斐紙であり、筆跡も両者同一とは見えない。たとえば、「人」や「給」の字を比較してみると次のとおり。それぞれ上段が文芸資料研究所蔵の当該断簡、下段が美保神社所蔵手鑑中の断簡の実例である。右は適例ではないかも知れないが、他にも挙例しうるとこ



ろ、ここでは省略に従いたい。

つまりは、この切についても、前節の「伝阿仏尼筆切」と同様に、いまだツレを見出だせていない。印象が似ていたとしても、実際に比較検討してみると右のようなありさまである。今回このような中途半端な報告をあえてするのは、この稿冒頭に述べたとおりではあるのだが、なるべく見やすい影印を掲げ、ひろく識者に教示・叱正を被りたいからに他ならない。諸賢には、ぜひとも微衷を察し、情報を寄せられんことを。

注

- (1) 池田和臣・加藤昌嘉・久下裕利・久保木秀夫・小島孝之・横井孝「座談会 王朝物語の古筆切(巢守は幻か?)」(『武蔵野文学』2010増刊夏号、二〇一〇年五月)。
- (2) 池田和臣・久保木秀夫・田中登・名児耶明・佐々木孝浩「座談会 古筆切研究の現在——今後どのように研究を進めていくか」(『リポート笠間』五一号、二〇一〇年一月)。
- (3) 小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」(伊井春樹編『本文研究 考証・情報・資料』第六集、和泉書院、二〇〇四年五月刊、所収)。
- (4) 『古筆手鑑大成』第十五卷 重美手鑑(島根・美保神社蔵)(角川書店、二〇〇五年七月刊)。

## 付記

このような体たらくではあるが、田中登・久保木秀夫の両氏には、ごく初歩的な質問を重ね、それぞれ懇切な教示を頂いた。せっかくの情報があったものの、稿者には所詮付け焼き刃。ここでも「ひろく識者に教示・叱正を被りたい」という気持ちを再度くり返しておきたい。